

## 論文要旨

マグヌス・リンドベルイ作曲《クラリネット協奏曲》における新たな継続的発展性

京都市立芸術大学大学院 音楽研究科  
博士（後期）課程 作曲研究領域 岡本伸介

本研究は、マグヌス・リンドベルイ Magnus Lindberg (b. 1958) の《クラリネット協奏曲 Clarinet Concerto》(2001–2002) とジャン・シベリウス Jean Sibelius (1865–1957) の後期のオーケストラ作品の構成法を照らし合わせ、リンドベルイの構成法における継続的発展性の新たな解釈を提起することを目的としている。

マグヌス・リンドベルイはフィンランド出身のポスト・スペクトル世代の作曲家である。彼は、同郷を代表する作曲家ジャン・シベリウスの後期のオーケストラ作品における継続的発展性から影響を受けているため、「シベリウスの後継者」と評されている。リンドベルイの構成法における継続的発展性は、彼の初期の作品である《トゥワイン Twine》(1988)などで用いられている発展的なシャコンヌ形式として反映されているとこれまで考えられてきた。つまり、フィンランド民謡に由来するシベリウスの継続的発展性は、リンドベルイの作品へ正確に反映されていたわけではなく、あくまで表層的な影響に過ぎなかった。しかし、彼の《クラリネット協奏曲》の構造は、シベリウスが《交響曲第5番》(1915)以降で用いたとジェームズ・ヘボコスキが主張する「旋回形式」に基づいていることが明らかになった。旋回形式とは、冒頭に配置された発端となる動機を、そのまま、または変容させながら繰り返す旋回的構造の連なりに基づく形式のことであり、繰り返され続けた動機は「テロス」と呼ばれる目標音型へ変容する。その結果として、楽曲は従来の形式論に捉われない、有機的な構造性を獲得することに繋がる。さらに、リンドベルイの《クラリネット協奏曲》のテロスは、シベリウスの《交響曲第7番》(1924)の特定の部分の構造と関連性を持つことも見出された。従って、本研究はシベリウスの旋回形式に基づいた作品とリンドベルイの《クラリネット協奏曲》の関係性を明らかにし、これまでの研究で見過ごされていたリンドベルイの一部の作品における楽曲構成法の特徴について、新たな解釈を提起するものである。

第1章では本研究で焦点を当てる旋回形式の概要について述べている。旋回形式はシベリウスがラリン・パラスケによる「カレワラ」の吟唱を聴いた経験に端を発しており、その経験を反映させた反復的構成法から発展した構成法である。本章では旋回形式の成立背景と、《交響曲第5番》と《交響曲第7番》におけるその用法を説明する。

第2章ではリンドベルイの《クラリネット協奏曲》の分析を行っている。旋回形式に基づいてこの作品を分析するために、最初にテロスとその起源を明確にする必要がある。この作品のテロスをシベリウスの《交響曲第7番》の特定の部分の構造から判断している。次に、この作品を構成する三つのマテリアルについて述べる。これらの内容は、本研究で特に重要

である楽曲の構造分割と旋回形式の発展的用法、テロス生成の過程を明らかにすることへ繋がる。旋回形式はリンドベルイのそのほかの作品でも使用されている可能性が高く、このことについて、第2章の最後に《フェリア FERIA》(1997–1999)の構造から考察している。

本論文の最後に、2023年12月までに発表、または発表の予定が判明しているリンドベルイの作品一覧を掲載している。

《クラリネット協奏曲》の分析によって、リンドベルイの継続的発展性における新たな探究が見出だされる結果となった。現代のフィンランド音楽と彼の思考の変遷を追っていくためにも、彼の楽曲構成に関する取り組みを今後も注視していく必要がある。本研究が、彼の作品の解釈における新たな視界を切り開くとともに、現代の作曲表現の可能性を広げることを期待している。